

きょうの潮流

雲ひとつない青空と強烈な暑さ。ミン、ミンと鳴くセミの音が耳に残る6日の広島▼平和公園近くにある広島県立第一高等女学校(現・皆実(みなみ)高)の追憶之碑の前で行われた原爆犠牲者追悼式に、10人近くの高齢女性が集いました。神奈川県原爆被災者の会前会長の中村雄子さんが呼びかけた当時2年の級友です。「86歳になったけど、子どものままで命を失った友だちのことを忘れてはいけない」と中村さん▼73年前のあの日、建物を壊して防火帯をつくる作業に動員された1年生223人は被爆し、亡くなりました▼2年生は学校ではなく、飛行機の部品工場で被爆。中村さんの左腕はガラス片でえぐられた傷が。「私たちはあの頃、国のためにといわれ、着たいものも着れずに、やりたいこともやれずに懸命に生きた。なのに、たった12、13歳で、未来が奪われた。戦争と核兵器は絶対に許せない」と。広島市平和記念式典のあいさつで「核兵器禁止条約の“き”の字も言わない安倍さんは世界に恥ずかしい。唯一の戦争被爆国の首相といえない」▼核兵器を「悪魔の兵器」と断じ禁止する世界の流れは後戻りしません。共闘の時代、国民的な共同という新しいステージに立った原水爆禁止2018年世界大会。若い人が目立ち、高校生が訴えました。「私たちの声で日本を変える。世界は変わる」▼核保有国とその同盟国での運動が決定的。ヒバクシャ国際署名と安倍政権を倒す9条改憲ノーのたたかいを合流させ、共同・共闘の前進を誓う夏です。

2018年8月9日(木)

きょうの潮流

あの日あの時、雲がなぜ途切れたのか。1945年8月9日午前11時2分。長崎への原爆投下の経緯を思い返すたび、身もたえするような思いに襲われます▼当時、米軍は広島に次ぐ2発目の投下目標として、小倉市(現・福岡県北九州市)を想定していました。しかし、視界不良のため断念。第2目標の長崎市に切り替えました。その長崎上空も分厚い雲に覆われていました。爆撃機の燃料が残り少なくなり、最終判断が迫られる中、一瞬、雲が途切れました▼米軍はこの雲の切れ目を見逃しませんでした。午前10時58分、投下された原爆は4分後に長崎市上空でさく裂し、爆心から1キロ圏内の人ほぼ即死しました。放射線に焼かれ、1年以内に亡くなった人は約7万4000人。一瞬の偶然が、その日長崎市にいた人々に過酷な運命を与えたのでした▼なぜ、原爆を投下したのか。米国は「早く戦争を終わらせるため」「多くの人の命を救うため」などと正当化していますが、今なお真相は解明されていません。しかし、多くの市民を瞬時にして殺害する原爆の非人道性が広島で証明された直後の長崎への原爆投下は、どんな理由をあげても許されない、大虐殺そのものです▼長崎の後も朝鮮半島やベトナム、キューバなどで核兵器が使用される危険が何度もありました。使用されなかったのは、わずかな幸運のおかげだったことが分かっています▼73回目の夏。長崎が、人類最後の戦争被爆地であり続けなければならない、とあらためて思います。